

中部 だより



中経連事務局員が、担当するエリアでお聴きた、各県の最新トピックや地域特有の情報を紹介するコーナーです。

長野県立大学・開学 ～その流れはやがて世界へ～

1.はじめに

Challenge your future



長野県立大学
THE UNIVERSITY OF NAGANO

高齢化・少子化に伴う生産人口の減少は、多くの自治体が抱える課題だ。長野県では、この課題を解消するための地域創生のア

プローチとして、「人材育成」を重視し、様々な取り組みを展開している。この4月には、その一環として県短期大学を4年制化し、新たに長野県立大学を開学した。長野県の「大学収容力※」は、約17%と全国最低



三輪キャンパス メインエントランス

水準で、毎年8割以上の高校生が県外流出する主要因になっており、同大は、「県内高校生らの選択肢を増やして県外流出の流れに歯止めをかける」「ビジネスや公共の分野でイノベーションを創出できる自立した人材を育成する」という地域の大きな期待を背負う。今回は、同大の設立への思いや特長などについて紹介する。

※大学収容力：県内18歳人口に占める県内大学入学者数の割合

2.長野県立大学の理念～7年もの議論を経て～

同大の基本構想は、「少子化の時代になぜ必要なのか」などの意見もある中、全国の教育関係者、企業出身者らを交えたメンバーによる「県立大学設立委員会」等で、約7年もの時間をかけて議論された。委員を務めた金田一学長も自ら県内企業を訪問し、若手社員の能力に関する現状や、求める人材などに関する経営者の「生の声」をヒアリングしたと言う。それらは大学の基本構想に反映され、「リーダー輩出」「地域イノベーション」「グローバル発信」といった3つのキーワードで表現される大学の基本理念や、カリキュラム等の礎となった。「県短大の単なる4年制化と考えたらこのようにはならなかった。産学の多くのメンバーの意見により、全く新しい非常に良いものができた」と金田一学長は語る。

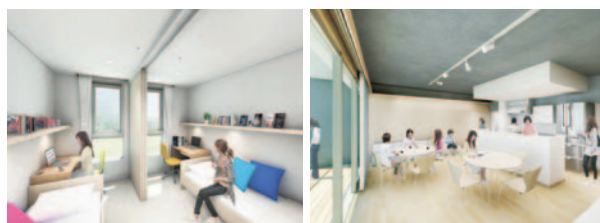
3.大学の特長～グローバル人材を育成～

同大には、従来の県短期大学の流れを汲む「健康発達学部（食健康学科、こども学科）」に加え、「グローバルマネジメント学部（グローバルマネジメント学科）」を設置。グローバルな視野を持ち、地域の資源や人材を生かして事業を展開できるビジネスリーダーや、社会や地域の課題解決に向け主体的に行動できるリーダーとなる人材育成を目指し、独自の就学環境が整えられている。

学部	学科	概要(コース・養成課程)	入学定員
グローバルマネジメント	グローバルマネジメント	グローバル・ビジネスコース 企(起)業家コース 公共経営コース	170人
健康発達	食健康	管理栄養士・栄養教諭養成課程	30人
	こども	保育士・幼稚園教諭養成課程	40人

1年次全寮制

1年次に全員が生活する学生寮「象山寮」は、共同生活を通じて協調性やコミュニケーション能力を育むことを狙う。2人1部屋の空間でお互いのリズムを共有することで他者への思いやりの気持ち、ダイニングキッチン等が完備された8部屋16名単位の共生空間「ユニット」での様々なコミュニティーにより、多様な価値観を認め合う寛容性が養われる。さらに、地域の企業経営者らをゲストに招いて寮生と語り合う「象山未来塾」、地域での社会貢献活動を通して市民性を育む「サービスマーケティング」など、教育課程外の学びのプログラムも用意され、学生と企業・地域の接点の場を積極的に創出する。「県立大学の全寮制



「2人部屋」およびユニット内の「リビングラウンジ」のイメージ

は非常に珍しく、自立の心、共同生活での協調性・社会性・コミュニケーションを学ぶ教育寮として重要な役割を担っている。将来的には、全寮制の強みを生かし、留学生も積極的に受け入れていく」と金田一学長は意気込みを語る。

学寮名の由来: 鎖国下の日本でいち早く海外を志向した先覚性を持ち、坂本龍馬、吉田松陰など多くの幕末の志士に多大な影響を与えた地元松代藩の教育者「佐久間象山」の名を冠した。グローバルな視野でイノベーションを創造する自立した人材を広く育てようという願いが込められている。

全員参加型海外研修

2年次には学部を問わず全員が海外短期研修「海外プログラム」に参加する。イギリス、アメリカ、スウェーデン、フィンランドなど6カ国いずれかの大学、職業学校、保育施設等へ2～4週間滞在。異文化体験や英語によるプレゼンテーション、現地学生との交流を通じて異文化を理解する力、英語による発信力、自ら課題に立ち向かうたくましさを養う。企業等の視察や専門分野の実習も取り入れ、語学だけではなく、2年次以降に本格化する専門分野の知見拡大にもつなげる。また、同大では全学生の海外研修を実現するため、1学期を2カ月とした4学期制を取り入れた。日本でも徐々に導入する大学が増えつつあるが、履修の自由度が増し、欧米大学のサマースクールに参加しやすい、海外留学生を受け入れやすいなどの利点があると言う。

4学期制導入の理由: 日本の大学のほとんどが4月入学の2学期制(4～7月、10～2月)を採用しており、欧米の大学の8割が実施している秋入学とは学期の区切りにずれがある(欧米大学は9～12月、1～5月)。そのため、海外留学生や研究生の受け入れが困難であるとともに、日本の学生が欧米の大学の夏休み(6～8月)に行われるサマースクールに参加する際にも不都合が多い。

少人数教育

同大では、学生一人ひとりの個性や資質にあった親身な教育を目指し、**少人数・双方向での授業**を積極的に導入。1年次には、日本語を使った表現力や思考・判断力、情報発信力を養う「発信力ゼミ」を1クラス16人程度で行い、双方向授業を多く取り入れた県立大学での学びに必要なスキルをじっくり身につける。1・2年次必修カリキュラムの「英語集中プログラム」では、4技能(読む、聞く、書く、話す)融合型の授業を1クラス25人程度で行い、実践的な英語力を養う。多くの大学では3年次よりはじまる「専門ゼミ」を2年次から開始するのも同大の大きな特長だと言う。



プレオープンキャンパスの様子

4.今後の期待～県政のシンクタンクへ発展～

グローバルな視野を持ち、地域にイノベーションを創出する人材の育成を目指し、同大では「長野モデル」とも言うべき新たな高等教育の一步を踏み出した。同大には、産学官や地域との連携を担う拠点施設として「ソーシャル・イノベーション創出センター(CSI)」も設置され、大学内外の多様な人と知的資源を結びつける「知と実践の循環」の役割も担う。

今後は、同大が県政のシンクタンクとして、そして豊かな生活、文化、産業の発展の礎となる「知の拠点」としての役割を果たし、長野県の地域創生、活性化が進むことを期待したい。

文:長野担当 小池 貴士

取材協力:長野県立大学 安藤 国威 理事長、金田一 真澄 学長
長野県

写真提供:長野県

長野県立大学ホームページ: <http://www.u-nagano.ac.jp>

長野県立大学トップ2人の開学にあたっての抱負

安藤国威理事長 (元ソニー(株)代表取締役社長)

日本の「ものづくり」は、1970年～1980年代にかけて非常に強かったが、1990年代以降は弱くなったと感じる。もう一度日本が国際競争力を取り戻すためには、「人づくり」を担う大学そのものが大きく変わらなければならない。早くから世界と同じレベルで物考えられるようになると、日本全体の輝きが増す。グローバルな時代の中で世界と対等に勝負できる人材をどんどん輩出していきたい。

金田一真澄学長 (慶應義塾大学名誉教授)

県立大学という、事なかれ主義になりがちだが、1年次全寮制や2年次海外留学に代表されるように、魅力的な教育実現のために必要なリスクは積極的に取ってきた。全国の大学や実業界から、教育を語り出したら止まらない素晴らしい教員陣も集まった。他の大学にはない質の高い教育実現に向け、個性派揃いの先生たちと一緒にチャレンジする県立大学を目指したい。



金田一学長(左)と安藤理事長(右)